認知症フレンドシップクラブ
アニュアルレポート 2013/2014

Dementia Friendship Club

認知症フレンドシップクラブ
アニュアルレポート　2013/2014

contents

2　認知症フレンドシップクラブとは、理事長挨拶

4,5　全人口の 12 人に 1 人が認知症の人という時代

6,7　STORY 01 地域へ出て行く一歩　RUN 伴が力に
認知症当事者が社会参加するきっかけづくり

8,9　STORY 02 オレンジリング 500 万人 養成のその先へ
認知症の人をサポートしたい人が活躍するために

10,11　STORY 03 当事者と一緒に暮らしの場を開拓
当事者が地域で立ち寄れる場所を増やす「つなぐ人」の存在

12,13　STORY 04 まちとまちが出合う意味
まちづくりを加速させるヒントを、他のまちに学ぶ

14,15　まちづくりの最前線、各地の事務局の活動

16,17　写真で振り返る 2013/2014 、会計報告

18,19　参加方法、謝辞

認知症フレンドシップクラブは
「認知症になっても安心して暮らせるまち」
をつくろうと、アクションを起こす人の
全国ネットワークです。

まちづくり

アクション

ネットワーク

アニュアルレポート発刊にあたって

２００７年に認知症フレンドシップクラブを立ち上げてから今年で８年目を迎えました。近年は、多くのメディアで認知症の特集が取り上げられるなど、認知症に関する社会的な理解や関心は、団体設立当初よりも高まってきているように感じます。

その一方で、認知症の人の鉄道事故を巡り名古屋地方裁判所において、「家族が見守りを怠った」として、遺族に約７２０万円の賠償を命じる判決が出されたことが議論になるなど、「自らが慣れ親しんだ地域で安心して暮らす」という視点から捉えると、認知症と共に生きることに未だ安心できない社会環境があることも否定できません。

認知症フレンドシップクラブは、設立以来、皆様からのご支援をいただきつつ、安心して暮らせるまちの実現に向け、活動を継続・発展して参りました。そうした発展に伴い、具体的なレベルで、どのような成果をあげてきているのかに関する説明責任があることも強く感じております。本レポートは、過去１年間の活動状況を整理し、みなさんにご報告するものです。１年間の歩みを振り返り、ただすべきはただし、雄々しく向かうべきは勇気を持ってのぞみたいと思っております。関係者の皆様におかれましては、引き続き、ご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

ＮＰＯ法人認知症フレンドシップクラブ
理事長　井出　訓

1/12

全人口の１２人に１人が認知症の人という時代

地域や社会は、認知症の人にとって
暮らしやすいものになっているのでしょうか？

認知症の人の数は、最新の調査によれば４６２万人。予備軍を含めると８００万人以上と言われ、高齢者の４人に１人を占めます。２０２５年には全人口の3分の1が高齢者となり、全人口の12人に1人が認知症の人という時代が到来します。高齢社会の進展に伴い、認知症は決して珍しい病気ではなく、誰もがなりうるものという認識が広まりつつあります。

その一方で、いったん認知症となると、自分にとっての当たり前だった今までの暮らし方が難しくなる現実があります。

認知症の人が暮らしで感じる困難には、記憶や見当識といった認知機能の低下に生じる第一の困難だけでなく、周囲の人や周辺環境から生じる第二の困難があります。

認知症になっても「普通に暮らす」ことを実現するために、まず、認知症の人の視点から、地域や社会に、どのようなバリアがあるのかを知る必要があります。

認知症の人の暮らしにくさの例

データで見る

認知症と日本の今

４６２万人

2012 年時点での日本の認知症の人の数
（厚労省調査研究班）

高齢者数の増加に伴い、推計される認知症の人の数も増加の一途をたどっています。世界が経験したことがない割合で、認知症の人が暮らす社会に突入しています。

６７％

家で暮らす認知症の人の割合
（東京都「認知症高齢者自立度分布調査」（H23）認知症高齢者自立度Ⅰ以上）

認知症の人は病院や施設にいるイメージがありますが、実際は半分以上が地域で暮らしています。国の政策も在宅推進となり、その割合は増加が予想されます。

５３％

コミュニティの一員であると感じることができない認知症の人の割合
（英国アルツハイマー病協会）

認知症の人の半数以上が、「自分がコミュニティの一員であると実感できない」と答えています。医療ケアの対象としてだけでなく、地域での貢献や、社会的な役割が求められています。

１０兆円

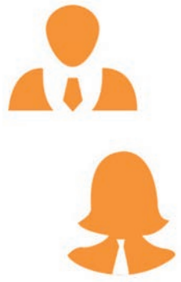
認知症に伴う社会的コスト
（英国調査よりの単純推計）

認知症に伴う社会コストには、医療・ケアのコストの他、介護する家族などのインフォーマルコストが含まれます。日本のコストは研究中ですが、外国の研究から類推すると、およそ 10 兆円になると推計されています。

１０万人

年間に、親の介護などで仕事を辞める人の数

親や配偶者の介護を理由に仕事を辞める介護離職は、年間 10 万人に及びます。
介護の社会化を目標に導入された介護保険制度ですが、介護と仕事を両立するのは、非常に難しい現状があります。



４９９万人

認知症サポーターの人数

全国の自治体は、認知症のことを勉強した市民を認知症サポーターとして養成してきました。2013 年度末で 499 万人。しかし多くの地域で、誰がサポーターか分からない、地域で活躍できる場がないなど、十分に活かされていない現状があります。

STORY 01

地域へ出て行く一歩　RUN 伴（とも）が力に

認知症の人もそうでない人も、少しずつリレーしながら
ゴールをめざして日本縦断する RUN TOMO-RROW(ラン伴)

「私、すぐ忘れちゃうんです。大事なことも、すぐに忘れてしまうんです。それでもね、認知症になって、私は人の優しさを知りました」

２年前、若年性認知症と診断された富士宮市の石川恵子さん（50）は、診断後、生きがいだった仕事を辞め、１年以上、家に引きこもる日々が続きました。

周囲に少しずつ理解者も増え、外に出られるようになってきた２０１３年、ＲＵＮ伴を知ります。一緒に走ろうと誘われて参加を決意。昔から体を動かすことが好きだった石川さんは、本番に備え、近所を走るようになりました。当日は、沿道から「ガンバレ恵子！」と応援を受け、担当の区間を走りきれたことに大きな達成感を得たそうです。今の自分を理解して支えてくれる地域の人の存在が、石川さんにとって大きな力となっています。

現在、石川さんは、地域の介護事業所で有給スタッフとして働くほか、認知症の当事者としての経験を語る活動を続けています。

認知症の人と地域の関係

地域からの孤立

認知症の当事者や家族は、認知症のことを話せず、地域から孤立することが多い

出会うきっかけ

認知症の人も含め、これまで接点のなかった人同士が出会い、気づきが生まれる

暮らしやすい地域へ

新たなつながり・行動が生まれ、誰もが暮らしやすい地域づくりの輪ができる

RUN 伴 参加者の声

自分は、認知症は遠い存在だと思っていました。でもちがいました。おじいちゃん達は、本当は明るく強く立派に生きていました。その姿が、すごく自分の中に残りました。

FC ユーベルの子供達（苫小牧市）

会社として、イベントのサポートの形で参加しました。これからも認知症を知ってもらうことを、企業がサポートしていきたいです。

アサヒグループホールディングス株式会社　火置恭子さん

イベント後も、歯科医院のスタッフのみなさんで RUN 伴 T シャツをユニフォームとして定期的に活用しています。患者さんや子ども達と認知症について自然に語る機会が増えています。

なかはら歯科医院（東京都）

RUN 伴 2013 データ

●走行距離
北海道～大阪 1700 ㎞

●参加人数
1472 名（1割が当事者）

●走行日数
16 日間（7 月～ 10 月）

●パートナー企業
10 社

2013 年の RUN 伴チラシ

STORY 02

オレンジリング500万人 養成のその先へ

認知症サポーター養成講座受講者が持つオレンジリング。国の目標を上回る５００万人もの人が手にしていますが、実際のサポートにはなかなか結びついていません。

認知症サポーターは、地域で認知症の人を支えることを目的に、２００５年に厚生労働省がスタートした事業です。全国各地で、一般市民を対象に認知症の基礎知識を学ぶ90分の講座を実施。修了すると、認知症サポーターの証としてオレンジリング（ブレスレット）が授与されます。認知症サポーターの数は、当初の目標である１００万人をはるかに超え、２０１３年度末現在で５００万人となりました。こうした人たちが活躍する地域がある一方で、多くの地域では、認知症の人とサポーターが実際に出会う機会がないまま、多くの『ペーパードライバー』が生まれ、暮らしやすい地域づくりには、つながっていない状況です。

サポ友（認知症フレンドシップサポーター）
認知症フレンドシップクラブでは、実際のサポート活動につながることを目的に、２００７年から、独自の研修とサポートの機会づくりを続けてきました。認知症の人を友人として支え、一緒にスポーツや趣味活動を楽しむ友だちということで、認知症フレンドシップサポーター（略称：サポ友）と名付けています。

町田事務局の活動

サポーター養成講座の90分の講座と、実際に認知症の人をサポートする行為には、大きなギャップがあるのではないかと考え、いくつかのステップを設ける動きが始まっています。

認知症フレンドシップクラブの町田事務局は、町田市の協力の下、認知症サポーター養成講座修了者を対象に、認知症の人とのコミュニケーション方法に力点を置いたステップアップ講座（町田市事業を受託）を実施、その後希望者に、認知症の人や家族と交流する機会を紹介しています。

市内在住の藤見守広さんも、こうしたステップを経てサポーター活動を始めた一人。退職後、社会に役立つことをしたいとサポーター養成講座を受講したものの、実際に活動することはなかったと言います。

ステップアップ講座を経て、実際に認知症の人や家族と交流してみると、「なんだ、認知症といっても自分達とそれほど変わらない。これなら自分でもサポートできる」と認知症への誤解が消えました。今では普段の暮らしのなかで、サポーター活動を楽しんでいます。ある時は、近所で帰り道がわからなくなってしまった散歩中の高齢者に気づき、さりげなく交番へ同行したこともあったとか。認知症の人も、普通に近所に住んでいることを理解したそうです。

町田市での、サポート活動につなげる取り組み

自動車の運転免許に例えると・・・

STEP 1

認知症サポーター養成講座	認知症のことを学びたい、サポートしたい人の学習機会	座学講義

STEP 2

認知症サポーターステップアップ講座	認知症の人との会話を想定して、参加者でディスカッション	実技講習（路上運転）

STEP 3

認知症の人や、家族の会と交流	実際に認知症の人と直接触れ合ってみる	路上運転（仮免中）

STEP 4

実践のサポート活動（サポ友）	地域での支え合いの実践！	免許取得 運転開始

かやく飯とお酒「かやく」（奈良市）
日頃、当事者と地元メンバーが利用するだけでなく、奈良へ旅行で訪れた他の地域の当事者が利用したことも

STORY 03

当事者と一緒に暮らしの場を開拓

“ 失敗しても大丈夫 ” 安心して出かけられる地域のスポットを増やす

お店を出る際に支払いに戸惑う、注文をしたものを忘れてしまう……。

認知症であることは外見からは分からないため、お店の人や他のお客さんから奇異な目で見られてしまい、外出を控える人も少なくありません。

奈良事務局の若野達也さんは、少しでも認知症の人が地域にとけ込めるよう、認知症の人が入りやすいお店を開拓しています。当事者の人と一緒に店舗に出向き「この人が来ますが大丈夫でしょうか」と説明する関係づくりからスタート。「もしお店でトラブルがあった場合、今までなら警察に通報されてしまうところが、紹介した自分に連絡がくる。そうすれば認知症の人にも楽しくお店を利用してもらえるでしょう」。家族からも「ここでは認知症をオープンにできて気を使わずに済む」「失敗しても待ってもらえる」と喜ばれています。

認知症の人に優しいお店とは、誰にとっても優しいお店であるはず。丁寧に説明すれば理解してくれる人がいることを励みに、認知症の人が気軽に立ち寄れる地域の場を少しずつ増やしているところです。

奈良事務局の活動

認知症の人が出かけにくい地域の現状

・機械の操作がわからない
・注文を忘れてしまう 等
注意されたり、視線が気になることで外出を控えるケースも

当事者と一緒にお店を訪れる

その人の特徴や連絡先が分かれば、個性あるお客として受け止めてもらえる

「お店とお客さん」という普通の関係に

お店側もお客となる認知症の人も、互いにメリットを得られる関係が築ける

フレンドシップスポットとは

認知症フレンドシップクラブでは、認知症の人も是非利用して欲しいというお店・地域の場所を、「フレンドシップスポット」として紹介しています。現在全国に 40 カ所ほどあり、当クラブのホームページから検索することができます。

【当事者の声】
認知症の人を特別な人とみなすのではなく、物事を理解するのに時間がかかる人だと認識する知識をもってもらい、コミュニティの一員として受け入れられることが大切であります。
認知症当事者の佐藤雅彦さん

（佐藤さん写真右）

フレンドシップカフェ開催

品川事務局では、「コーヒーでも飲みながら、一緒に語り合ってみませんか？」と呼びかけて、認知症について気軽に語れる『フレンドシップカフェ』を開催しました。会場は認知症の人に優しいお店としてフレンドシップスポットとなっているお店。営業時間内の利用客が少ない時間帯を活用して実施したものです。

チラシを見て来たという認知症の家族からは、「普段、気軽に家族の状況を話すことができない」と涙ながらに語る場面も見られました。

地域にとけ込む場所で、自然と認知症ついて語れる場所があること、当事者や介助者の交流のステーションとなるような場の必要性を感じる機会となりました。

まちとまちが出合う意味

まちづくりを加速させるヒントを、他のまちに学ぶ

STORY 04

認知症フレンドシップクラブでは、事務局のある地域を中心に、全国の当事者・家族や支援者、まちづくり関係者の交流を進めています。それぞれのまちでは、地域づくりで成果をあげている部分もあれば、なかなか解決できない壁にぶつかっている部分もあります。認知症の人も安心して暮らせる地域を目指すまちとまちが交流し、互いのまちについて知ることで、壁を乗り越えるヒントが見つかるのではないかと考えています。

3月に開催された認知症の人の全国ソフトボール大会（Dシリーズ）も、まちとまちが交流することを目的として、富士宮市の皆さんを中心に組織された実行委員会とともに共催したイベントです。

神奈川、静岡、大阪、奈良、和歌山、愛知から認知症の当事者・家族・支援者らが集まりソフトボールを楽しみました。地元富士宮市では、介護施設、商店街、ローカルFM、旅館組合、市役所などが連携して前夜祭を開くなど、訪れた人々を温かく迎え入れました。

楽しい時間を共有した関係は、その後も継続し、お互いのまちを訪ねたり、研修の講師として招くなどの発展を続けています。

認知症の人の全国ソフトボール大会

日時　2014年3月16日午前
場所　静岡県ソフトボール場（富士宮市）
東日本チーム対西日本チーム（1試合）

仲間が仲間を呼び全国から集合した人たちが東西チームにわかれ白熱した試合が展開されました。選手としてプレーする当事者を、サポーターが投げたり走る方向を援助する形で試合を進めたものの、本気モードの当事者の頑張りに、サポーターは不要だったとの声も。試合は16対17で東日本チームが勝利し、来年の再会を約束して閉幕しました。

いつの日か、甲子園をめざすように、認知症に優しいまちが集う大会になったら……、新たな目標がうまれています。

写真①

写真②

写真③

写真④

写真⑤

写真①デイサービスでの前夜祭。
写真②有志が作成した優勝旗。
写真③優勝トロフィーは東日本チームに。写真④ランニングホームランも飛び出した白熱プレー。
写真⑤富士山バックに記念写真。

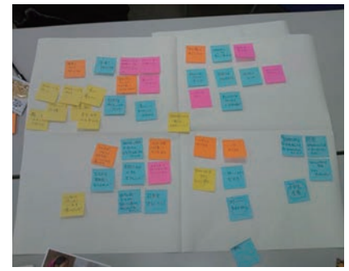
ウエストジャパン・ドルフィンディアーズ
（西日本チーム）
奈良市：若野達也さん

自分は、いま目の前にいる認知症の人に笑顔になってもらいたいんです。数年待てば自分たちのまちでも野球大会ができたかもしれませんが、症状が進んでしまう方々に、いま楽しんでもらうためには時間がない。その思いを富士宮のみなさんが受け止めてくれました。まちぐるみで歓迎していただいて、「また富士宮に行きたい」と参加したみなさんは来年に向けてキャッチボールの練習に励んでいますよ（笑）。

イーストジャパン・レインボーサーモンズ
（東日本チーム）
富士宮市：稲垣康次さん

まちづくりとして思い描く夢はたくさんありますが、Dシリーズで全国の方が富士宮に集まり楽しんでいただけたことは、想像から現実に踏み込む良いきっかけになりました。イベント後も、実行委員会のメンバーが毎月まちづくりの会を開いています。奈良で地域づくりに励むみなさんと出会えたことが、大きなうねりとなって、一気に行動につながったことに感謝しています。

まちづくりの最前線
各地の事務局の活動



事務局ギャザリング開催

認知症フレンドシップクラブでは、年に1回、事務局代表を中心に全国からメンバーが集まり事務局ギャザリングを開催しています。各地の活動の様子を報告し、課題やアイデアの情報交換を行い、これからの活動の方向性を話し合う場となっています。２０１３年は、11月に札幌で開催され、全事務局から17名が参加しました。

各地の活動報告や運営、広報・ファンドレイジングなどを強化していくためのワークショップの他、認知症の課題に関心が非常に高くなっている最近の社会情勢で、どのような役割が期待されているのか、また、活動エリアが広がり、事務局数が増える中で、どのように事務局同士をつなぎ、事務局同士の連携企画を創造していけるのかなどについて話し合いました。ギャザリングでの対話をきっかけとして、函館の物産を使った奈良のプロジェクトや、各地の事務局も参加したソフトボール大会（Ｄシリーズ）などいくつものアイデアが既に実現しています。

札幌・石狩事務局
地域の認知症家族会を定期開催。サポ友にて当事者の美術鑑賞などをサポート。

函館事務局
まちづくり市民セミナー定期開催、100 名を超える参加。地域交流サロン実施。

帯広事務局
行政と連携して、福祉フォーラムや認知症ステップアップ講座開催。認知症セミナー実施。

恵庭事務局
市内公共機関に RUN 伴ポスター掲示、恵庭市長がランナーとして参加。地元ラジオにて PR 活動実施。

東京事務局
企業や自治体と認知症フレンドリー社会にむけてフューチャーセッション実施。RUN 伴東京ゴール後にドリームプレーンワークショップ開催。

品川事務局
地元商店街にてチラシを配布しながら PR 活動。スポットでのフレンドシップカフェ開催。

町田事務局
認知症サポーター養成講座、ステップアップ講座定期開催。カフェ、サポ友など複数の活動を展開。

千葉事務局
井出代表が、NHK『ラジオ深夜便』に出演し、当クラブの取り組みを紹介。

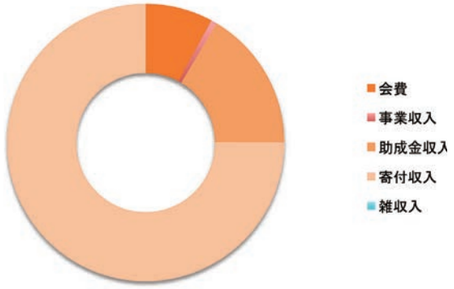
奈良事務局
RUN 伴大阪城ゴールイベント盛況。旅サポで富士宮市の方を受け入れ。イベントでの啓蒙活動等。

豊中事務局
事務局設立のキックオフイベント実施。認知症の女性が眩しく輝けるよう、美を意識した癒やしのイベントも開催。

2013 年度　会計報告

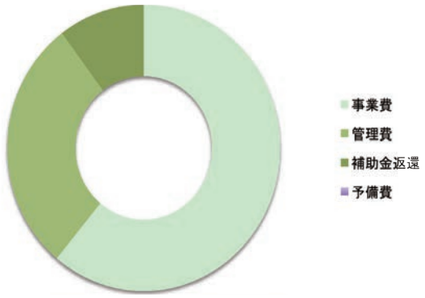
収入

会費	599,000
事業収入	52,560
助成金収入	1,250,000
寄付収入	5,694,796
雑収入	739
合計	7,597,095



支出

事業費	5,202,181
管理費	2,455,213
補助金返還	871,000
予備費	0
合計	8,528,394



2014 年度　活動方針

- RUN伴 2014（ 北海道から広島へ・2500 ㌔）
- 認知症地域ネットワークフォーラム開催（RUN伴参加者を中心に地域のつながりを深めるイベント。全国6ヶ所実施予定）
- 新規事務局開設支援（堺、東住吉、魚沼、富士宮）
- 発信・コミュニケーションの強化（ニュースレター年2回発行、アニュアルレポート作成）

写真で振り返る2013/2014

2013 年

4 月

豊中事務局開設
大阪・豊中事務局が開設。関西地方の活動も充実してきました。

5 月

寄付付き自販機
サントリービバレッジサービスのご協力で寄付付き自販機を設置（北海道）

6 月

7 月

RUN 伴 2013
3 年目となる RUN 伴は、北海道から大阪まで 1700 キロ、1500 名がタスキをつなぎました。大阪城広場でのゴールイベントも大盛況！

8 月

9 月

事務局ギャザリング開催
全国 10 カ所の事務局が北海道に集結し、まちづくりについて語り合いました。

10 月

11 月

DFJI とイベント共催
企業・自治体・NPO などが認知症の課題を起点にネットワークを組んだ、「認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ」とイベントを共催しました。

12 月

2014 年

1 月

イギリス訪問
井出代表とメンバーが英国のまちづくり関係者を視察しました。
（フレンドシップクラブの事業ではありません）

2 月

D シリーズ開催
日本初、全国認知症ソフトボール大会が富士宮市で開催。各地のメンバーも選手・応援団として参加し、イベントを共催しました。

3 月

活動に参加するには

イベント

・RUN 伴、D シリーズ
・認知症カフェ
・事務局主催イベント

研修・講座

・認知症ステップアップ講座
・認知症や地域づくりに関するセミナーなど

会員になる

会員との情報交換や交流、サポ友等の利用のほか、ニュースレターが届きます。

事務局を立ち上げる

認知症になっても安心して暮らせるまちづくりのためアクションを起こしたい方を募集しています。

寄付で応援する

認知症になっても安心して暮らせるまちづくりにむけ、ご支援お待ちしております。

サポ友・スポットになる

認知症の人をサポートする「サポ友」や認知症の人が利用できる「スポット」を募集中。

ご支援をお願いします

活動全般

当法人はみなさまからの会費と寄付・助成金により運営されております。安心して暮らせるまちづくりのため、みなさまのご支援お待ちしております。頂いたご寄付は事務局運営費として使わせていただきます。

【寄付・会費のお振込先】
ゆうちょ銀行
九〇八支店　普通口座
口座番号：4317094
加入者名：認知症フレンドシップクラブ

RUN 伴への寄付

RUN 伴は、個人・企業・団体のみなさまの協力・支援により運営されております。みなさまの応援お待ちしております。
※寄付一口（3 千円）につき、記念 T シャツをプレゼントいたします。ご希望の際は、 寄付フォームのメッセージ欄又は振込用紙備考欄に T シャツのサイズと郵送先をご記入ください。
http://runtomo.jimdo.com/（寄付・応援ページをご参照ください）

【寄付・会費のお振込先】
ゆうちょ銀行
九〇八支店　普通口座
口座番号：4689283
加入者名：ラントモ実行委員会

詳しい情報は、認知症フレンドシップクラブのホームページ、
Facebook で発信しています。
メルマガは2ヶ月毎に発行していますので是非ご登録ください。

2013 年度、活動に参加してくださった皆様、
ご支援下さった全ての皆様に御礼申し上げます。
また RUN 伴などに格別のご支援頂きました
団体・企業の皆様も重ねて御礼申し上げます。

助成　Shigeo & Megumi Takayama Foundation
RUN 伴 2013 パートナー企業　アサヒグループホールディングス株式会社
株式会社 浅井ゲルマニウム研究所、ケアプラザ新函館・たけだクリニック
たっくんのバームクーヘン屋さん、なかはら歯科医院、株式会社 ファミリーマート
株式会社 富士通研究所、MADAME SHINCO
RUN 伴 2013 共催　北海道認知症の人を支える家族の会
RUN 伴 2013 後援　北海道認知症グループホーム協会、富士宮市
寄付付き自販機　サントリービバレッジサービス株式会社
認知症プロジェクト　国際大学 GLOCOM　株式会社 富士通研究所

認知症フレンドシップクラブ アドバイザリーボード
阿保順子（北海道医療大学看護福祉学部教授）
岡田誠（株式会社富士通研究所 R&D 戦略本部　シニアマネージャー）
佐藤雅彦（認知症当事者）
田辺毅彦（北星学園大学文学部教授）
西村敏子（北海道認知症の人を支える家族の会事務局長）
八森淳（公益社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所地域医療研修センター副センター長）
前田隆行（町田市つながりの開理事長）
松本一生（松本診療所ものわすれクリニック理事長・院長）
宮崎直人（有限会社グッドライフ代表・北海道グループホーム協会会長）
＜敬称略、五十音順＞

発行：NPO 法人 認知症フレンドシップクラブ
E-mail ： info@dfc.or.jp
FAX：03-4333-0405
http://dfc.or.jp/
http://www.facebook.com/dfc.japan

Publisher　：　井出　訓
Editor in Chief　：　三浦亜希子
Editors　：　徳田雄人、竹内 潔

Dementia Friendship Club

Annual Report 2013/2014